

氏名(本籍)	鎌田東二(埼玉県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1708号		
学位授与年月日	平成13年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	哲学・思想研究科		
学位論文題目	言霊思想の比較宗教学的的研究		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	荒木美智雄
副査	筑波大学教授	博士(文学)	棚次正和
副査	筑波大学助教授	文学博士	伊藤益
副査	筑波大学講師	博士(文学)	木村勝彦

論文の内容の要旨

本論文は、エリアーデのいう「言語の呪術—宗教的価値づけ」の一事例としての日本の「言霊思想」に着目し、その特有の宗教的言語意識が含む内実と歴史的展開に対して考察することを企図したものである。その論述は、大きく二つの課題に対して向けられる。一つは、近世および近代の日本における「言霊思想」に焦点を絞って、主要な言霊論者や言霊思想家による所説を概観しつつ、それを日本思想史の内に位置づけるという課題であり、いま一つは、日本の言霊思想を西洋の宗教言語や言語論と対比しながら比較宗教学的考察を試みるという課題である。

この二つの課題の達成に向けて、本論は以下のように構成されている。すなわち、序章「人類文化と言語」、第一章「言霊思想の思想史的考察」、第二章「言霊思想の比較宗教学的考察」、終章「本研究のまとめおよび今後の課題と展望」である。

まず序章において、著者は従来の宗教研究ではほとんど考察対象とならなかった「声音」とその受容器官である「耳」に対する分析を行い、霊性と身体性をつなぐ媒体としての声の働きに着目しつつ、耳の発生学的形態学的特徴と構造を論じ、「聴く」ということの宗教文化をユダヤ—キリスト教の歴史の中に探っている。また、宗教言語の問題として言霊思想を取り扱うに際して、言語が物質的次元、社会的次元、霊的次元を含むことを指摘し、多次元的多層的な言語現象が有する全体像を見失わないように注意を喚起している。

第一章では、日本における宗教的言語意識の歴史的な展開の跡を概観することを企て、日本の言霊思想を次の七種類の形態に分類している。すなわち、(1) アニミスティックな「草木を言問ふ」生命の深層に根ざす「言語生命観」、(2) カオス的な荒ぶる状態を言向けてコスモスを樹立する「言語定型観」、(3) 全宇宙を大日如来の真言の顕現と見る空海の「声字実相観」、(4) 称名念仏や唱題の専修行に結実した「口唱行力観」、(5) 歌道と仏道の合一を説く「歌即陀羅尼観」、(6) 我が国固有の音声法則と意味法則との結合に形而上学的思弁を加える国学者達の「声音法則観」、(7) それがさらに発展して五十音や七十五音の構造と天地自然の構造との類比を論ずる「言霊宇宙観」である。著者は、これら七種類の形態相互の結合関係を具体的な事例を挙げながら分析することを通して、言霊思想を日本思想史の脈絡の中に位置づけることを試みている。

この言霊思想の思想史的な位置づけの作業を行った後に、著者は近世と近代における主要な言霊思想家に考察の焦点を絞って、その思想の内実と特質に関して精緻な分析を施すよう努めている。取り上げられた主要な思想

家は、江戸末期の山口志道、中村孝道、平田篤胤、明治期の大石凝真素美、大正・昭和期の出口王仁三郎、川面凡児、友清歆真、岡田茂吉、折口信夫らである。それぞれの言霊論の特性を描出する際に、同時に原典からの豊富な引用と図表の添付によって特有の意味世界へと誘導している。山口志道『水穂伝』の七つの図形（フトマニノミタマ）や『稻荷古伝』の十二の図形、中村孝道の「言霊真澄鏡の図」、大石凝真素美の「六角切り子の玉の図」などは、言霊論の骨子を象徴化した図像的表現である。言霊思想家達にはほぼ共通に見られる所説は、宇宙創成と神霊発現と言霊（言語）発生という三者に照応関係があり、その三者の照応関係が「言霊」を中心に把捉されているという点である。このような所説の根底には、一音一義説があれ、一音多義説であれ、音（音韻）と義（意味）との間に想定された象徴的連関に対する視線がある。

上述したような一連の言霊思想家達による言霊論の特性を描写する考察が、本論文の実質的な中核部を成すものであるが、著者の論述の頂点は、大本教の出口王仁三郎による言霊運動に置かれている。山口志道の言霊学を火水の体（大本）とし、中村孝道の言霊学を火水の用（日本）と見て両説を総合して独自の言霊学を樹立した大石凝真素美を基本的には継承しながらも、出口王仁三郎は、他面において言霊学を宗教体験や言語実践という実用面で積極的に活用させ、「言霊の宗教」として大本教を完成させた人物と捉えられている。

第二章では、前章の考察を踏まえた上で、言霊思想に対する比較宗教学的考察が行われている。そこでは、いったん言霊思想を宗教言語として定位して、宗教言語が有する特性を日常言語や科学言語や詩的言語と比較・対照することによって照射することが試みられている。宗教言語は、含意性・多義性・象徴性への志向性において詩的言語と共通する一方で、明示性への志向性において科学言語と共通し、かつ言語場の強い誓約を受ける点で日常言語と共通するものであるが、宗教言語の固有性は、それが言語場を改変し、場の関係性を変換するという現実の変革や再創造の働きにあることが示される。さらに、宗教言語の特質を思想史的に俯瞰して、西洋のユダヤ・キリスト教的な宗教言語が契約の真理性を信仰の中心とする「律法的（契約的）言語観」を中核として内包すること、また日本の宗教言語が場の情勢や状況に間主観的に規制される「八意的言語観」を含んでいることを折出し、出口王仁三郎を始めとする神道系新宗教の教祖達による言霊論や言霊実践において重要な役割を演じた言語遊戯に着眼し、その同音多義性を利用して意味地平の飛躍的な拡充や、コモンセンス（常識）をノンセンス（無意味）で攪乱しつつダブルセンス（両義）やマルチセンス（多義）の意味世界を顕現せしめる機能や力動を論及している。

そして終章では、本論文において展開された様々な論述を再び簡潔に要約し直すとともに、今後の課題や問題点に関しておおよその展望が述べられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、二つの課題達成を目指したものである。一つは日本の近世・近代における言霊思想の展開を辿ることであり、もう一つは日本の言霊思想を比較宗教学的視点から他の地域の言語思想と関係づけてその固有性を折出することである。前者は日本の言霊思想の通時的な概観であり、後者は比較研究の視座からの言霊や宗教言語に関する考察である。著者の企図は、宗教研究においてややもすると看過されてきた「言霊思想」の内実を踏査した「問題提起の書」として規定することができる。著者の試みは、とりわけ日本の精神風土に開花した多種多様な言霊思想の流れを忍耐強く追跡しえたという点において成功している。この言霊思想を捉える際に示された考察の射程の広さこそ、著者の力量が遺憾なく発揮されているところであり、容易に他の追隨を許すものではない。また、そのような言霊思想について統一的な俯瞰を提供しえたことは、従来の先行研究ではほとんど未開拓の領域であったが故に、先行研究の不備を補うという意味では、先駆的な業績として高い評価に値するものと言える。さらに、日本の言霊論者達の所説に関して本論文に掲載された思想的な関係図や多数の引用箇所は、日本の言霊思想に関する資料集や百科辞典的な記述としても利用できるものであろう。

ただし、以下に列挙する諸点については問題点や不明な点があり、今後の解明が期待される。まず、宗教現象としての「言霊思想」の解明が必ずしも十分ではなく、個々の言霊論の特性描写に関心の大半が注がれているために、言霊論者の所説の根底をなす思想の核心部が論究されていない憾みがある。そのことと関連するが、第一章の論述と第二章の論述とが有機的に結合しておらず、全体として「言霊」概念が鮮明には結像していない。また、比較研究の際に著者が取り扱った事例は西洋にほぼ限定されており、もっと豊富な事例を世界の諸宗教に探索する必要がある。著者は言霊思想を言事融即観を土台にして捉えているが、むしろ言事融即観の破綻（言語の危機）を契機に誕生したのが言霊ではなかったかという疑念がある。この疑念に答えることは重要であり、聖なるものを顕わにしつつ隠すという象徴の逆説的構造や、近世言霊思想において五十音や七十五音の体系が登場してきた思想的背景などに関する考察においても、無視しえぬ論点となるであろう。さらには、言霊論では人間一般に共通する普遍的な次元と文化・社会に固有の特殊な次元との区別やその両次元の関係について論究すべきであり、それは言霊の今日的な意義を探求する作業とも連動することになるはずである。

以上のような問題点があるとはいえ、日本の宗教的言語観を「言霊思想」の視点から折出して、その多様な膨大な流れを統一的に整序しえた著者の力量と知見は、高い評価に値するものである。また、本論文に提示された著者の諸見解は、学界に寄与するところ大であり、学位論文としての価値も十分に認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。